



こーひーぶれいく

## 桃は恋人

小野 俊朗

Ono Toshiro

我が町（岡山県浅口郡里庄町）には3つの宝があります。仁科芳雄博士と藤井風君、それと白桃です。

4月になると我が家の前と周囲は濃いピンク色をした桃の花で埋め尽くされます。“春が来た”とウキウキしてきます。私の祖父は（仁科博士と一緒に高等小学校へ通っていました）桃を出荷していました。夏になると祖父の家の納屋には出荷できない桃がゴロゴロと転がっていました。鳥につつかれたり虫に食われたりしたキズ物ですが、毎日毎日自由に食べていました。むしろ虫たちの方がよく知っており、このキズ物の方がキレイな物より味は良いのですが、たまには出荷するキレイな桃を食べたくて、こっそりと手を伸ばすものすごい剣幕で怒られたものでした。

桃の木の寿命は20年から25年と短く、祖父が亡くなってからは寂しくなっていました。私がニューヨーク留学から帰った後、二十数年前より我が畑に植えていきました。いまや我が畑には10本、叔父の畑を合わせると20数本の桃があります。桃の花は品種が違えども一斉に花が開き、畑の上をピンクの絨毯のように埋め尽くすのは壮観です。愛おしささえ感じます。

花が散る頃になると、桃の世話が一層忙しくなります。桃には害虫等が多く、1年でも手を抜くといひ実が取れなくなり、木も傷んでしまうというわがまま娘です。開花前に2回薬剤を散布していますが、花が散る頃からそれぞれ違う薬剤を更に3回散布します。農協には薬剤散布のカレンダーがあり、出荷するプロは毎月のように散布します。私は、一応農協の組合員ではありますが、週末農業の兼業農家として、できるだけ手抜きを旨としています。我が桃は6月初旬の「はなよめ」に始まり、「日川白鳳」

「加納岩白桃」「白鳳」と続き、7月下旬からは真打の「清水白桃」が登場します。その後に「白麗」「大和白桃」で終焉を迎えます。岡山の桃は品種ごとに異なった袋を1個1個にかけて大事に育てます。そのために色白で、きめ細やかなのが特徴です。その中でも「清水白桃」はなめらかな柔肌に気品のある香りをまとい、とろけるような食感で、まさに桃の女王です。

5月中旬より実を間引いて（摘果）いき、その後残した実に袋をかけていきます。5月から6月の強烈な紫外線を浴びながら、脚立に上っての大変な作業です。1本の本木に500枚位かけることもあります。この頃が一番忙しく、しばしば「農繁休暇」をとります。妻からは「もっと実を落として、少なくしないとおいしい桃ができない」と、いつも言われます。プロは花の段階から不要な花を落としますが、そこはアマチュアで欲張りな貧乏根性が出てしまいます。雨や風にあおられて枝が折れる等の苦難を乗り越え収穫を迎えます。我が桃は木で完熟させることもあり、袋をかけたうちの3~4割位の歩留まりです。出勤前の朝4時頃に起きて収穫することもあります。桃は傷みが早く、その日のうちに各地へ配送します。残った桃は妻が友人や知人に配達し、夜には残り香だけできれいさっぱりとなくなります。私はいい桃を取りおいて、果汁の滴るまま丸かじりをし、更に毎朝ヨーグルトと一緒に食べるのがこのうえない至福です。この時期には元同僚（女子会）が来て桃狩りを開催します。盆が過ぎる頃になると桃がなくなり一気に寂しくなります。その後はお礼肥をして糞を根元に敷いてやり、そして大事な剪定作業を行い、狂乱の1年が終わります。

我が畑には1年を通して種々のフルーツが実ります。サクランボ、ポポー、ブルーベリー、ザクロ、柿、ミカンです。すだち、柚、レモン、梅もあります。岡山にお越しの際は是非お立ち寄りください。ただし、「お土産」は必須です。

（岡山医療専門職大学健康科学部理学療法学科）